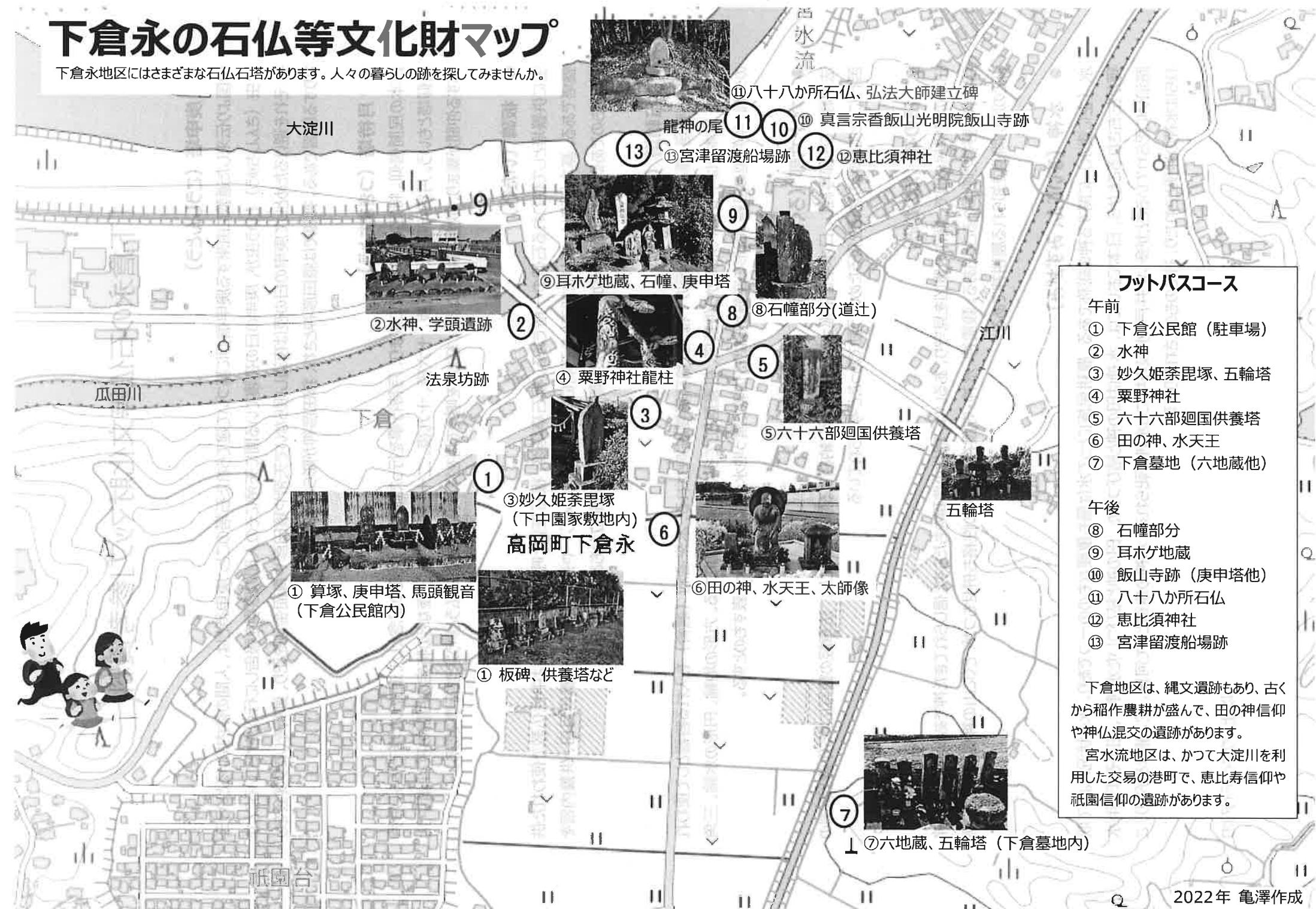


# 下倉永の石仏等文化財マップ

下倉永地区にはさまざまな石仏石塔があります。人々の暮らしの跡を探してみませんか。



# 「下倉永の石仏等文化財マップ」参考資料

## ● 庚申塔（こうしんとう）

中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のこと。庚申待とは、人間の体内にいるという三尸虫（さんしちゅう）という虫が、庚申の日の夜寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行くとされていることから、それを避けるためとして庚申の日の夜は夜通し眠らないで天帝や猿田彦や青面金剛を祀り、勤行をしたり宴会をしたりする風習である。神道では猿田彦神とされ、猿田彦神が彫られることがある。

## ● 月待塔（つきまちとう）

日本の民間信仰。特定の月齢の夜に集まり、月待行事を行った講中で、供養の記念として造立した塔である。月待信仰塔ともいう。月待行事は、十五夜、十六夜、十九夜、二十二夜、二十三夜などの特定の月齢の夜、「講中」と称する仲間が集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという宗教行事である。

## ● 板碑（いたび）

主に供養塔として使われる石碑の一種である。板石卒塔婆、板石塔婆と呼ばれる。板碑は中世仏教で使われた供養塔である。基本構造は、板状に加工した石材に梵字=種子（しゅじ）や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだものである。頭部に二条線が刻まれる。実際には省略される部位分もある。

## ● 五輪塔（ごりんとう）

主に供養塔・墓として使われる塔の一種。五輪卒塔婆とも呼ばれる。本来舍利（遺骨）を入れる容器として使われていた。日本では平安時代末期から供養塔、供養墓として多く見られるようになる。方形の地輪、円形の水輪、三角の火輪、半月型の風輪、団形の空輪からなり、仏教で言う地水火風空の五大を表すものとする。

## ● 六十六部（ろくじゅうろくぶ）

法華経を66部写経し、日本全国を巡って66の寺社に納経する修行者のこと。法華経の書写による作善と廻国の苦行によって滅罪の功德を得るために行動であったと考えられている

## ● 田の神（たのかみ）

日本の農耕民の間で、稻作の豊凶を見守り、あるいは、稻作の豊穣をもたらすと信じられてきた神である。作神、農神、百姓神、野神と呼ばれることもある。穀靈神・水神・守護神の諸神の性格も併せもつが、とくに山の神信仰や祖靈信仰との深い関連で知られる農耕神である。

## ● 水神（すいじん、みずがみ）

水（主に淡水）に関する神の総称である。農耕民族にとって水は最も重要なものの一つであり、水の状況によって収穫が左右されることから、日本においては、水神は田の神と結びついた。田の神と結びついた水神は、田のそばや用水路沿いに祀られていることが多い。井戸・水汲み場にも水神が祀られる。水神の象徴として河童、蛇、龍などがあり、これらは水神の神使とされたり、神そのものとされたりする。

以上、ウキペディアより